

大津崎門派 川島栗齋

—— 伝記・著述及び学問思想の一斑 ——

松
本
丘

大津崎門派 川島栗齋

——伝記・著述及び学問思想の一斑——

松 本 丘

緒 言

山崎闇齋の学問は、主としてその門弟浅見綱齋・佐藤直方・三宅尚齋の崎門三派と、神道を専らとする垂加派とによつて継承されてゆくのであるが、そのうち浅見綱齋派の主流は若林強齋によつて引継がれた。強齋が京都堺町通に開いた学堂望楠軒は、彼の歿後、門人の小野鶴山、同じく西依成齋が相次いで継承し、その後も幕末までよく維持されたのであつた。この学統より梅田雲浜・有馬新七等が出たこともあり、維新回天の思想的源泉として称揚されることも多かつた。

右学統については、綱齋・強齋に関する研究が積み重ねられて来たのに比して、強齋歿後の望楠軒の学問に関しては、近藤啓吾翁・岸本三次氏による一連の研究⁽¹⁾があり、筆者も成齋門人の奥野寧齋に関して少しく検討したことがあるが、⁽²⁾必ずしも詳細が明らかにされてゐるとはいひ難い。そこで本稿にては、天明・寛政から文化年間にかけて近江大津にて活動し、当時の望楠軒学派の中心的学者であつた川島栗齋（宝暦五年〜文化八年）の事蹟と学問思想の一端を述べ、江戸時代後期に於いて綱齋・強齋の思想が如何に継承・展開されてゐたのかを知る材料を加へてみたい。

一、栗齋の人物

栗齋については、近藤啓吾翁に「川島栗齋所講『論語講義』について―崎門朱子学概説―」（同『続々山崎闇齋の研究』神道史学会、平成七年に所収）、及び「川島栗齋『祝中島成章元服』詩について」（同『四禮の研究』臨川書店、平成十五年に所収）があつて、既にその略伝や詩文の特色が述べられてゐるのであるが、ここでは、近藤翁も用ゐられた栗齋の詩文集『撃壤集』（後述）等によりつつ、改めてその生涯を詳述しておく。

まづ、川島家の香華所、大津市長等の傳光院に現存する栗齋の墓碑を見ると、表に「川島栗齋先生之墓／妻吉原氏附」と刻し、陰には、

先生初名正臣、後改寛正又直正、称專藏、号栗齋、别号清清翁、宝暦五年乙亥秋九月廿四日生、文化八年辛未秋七月廿二日終

川島栗齋墓碑



（大津市・傳光院）

とあつて、基本的な事項が知られる。^③

また、明治四十四年の『大津市志』（大津市私立教育会編、淳風房）の人物篇に栗齋の項があり、ほぼ碑陰の内容を踏襲してゐるが、「世々石原氏の吏たり。」の記事が加へられてゐる。石原氏とは、大津代官を務めた石原清衛門家のことであり、川島家がその下僚を務めてゐたことは、『京都武鑑』^④及び『大津代官所記録』^⑤によつて知られる。但し石原氏が大津代官となるのは安永元年であり、それ以前より川島家は大津代官所（享保七年より安永元年までは京都町奉行支

配)の同心を歴仕してゐた。この事は、『大津代官所記録』中の『西山町字大濱一件留』に見える享保十四年の覺に「川嶋寛右衛門」の名があり、『京都武鑑』大津御役所の項には、宝曆九年、東組同心組頭として「川嶋専蔵」、明和五年と安永七年の東組目付として「川嶋惣右衛門」が見えるのによつて知られる。なほ、右の専蔵・惣右衛門は共に栗斎の父正為であると思はれる。

しかし、栗斎自身は代官所の吏員となる道を歩まなかつた。即ち、後に掲げる栗斎の著『或問雑録』に「年成童ニ過テハ、毎々官長ヨリモ召出スベキ命ヲ蒙リシカドモ、諸藝修行ノ障リ也トテ、コレヲ辞謝シテ、年三十歳ニ至ルマデ膝下ニ成長シ侍リ」云々とあり、父正為の意向により学問に専念せしめられたものと考へられる。寛政二年、父が代官所を致仕した時に栗斎が撰した「賀^三大人致仕」(『撃壤集』所収、以下栗斎詩文の引用は全て同書による。原漢文)に、「即日男正明に命じ其の禄を継がしむ」と見え、父の後には栗斎の弟正明が襲つたのであつた。

さて、栗斎の「題^二蔵書録^一」には、
予、幼きより書を読むを好む。家、素より四書の集註・五經の素本・古文・三体詩・文選傍訓有り。父に従ひて之を読み、歳十有二に及び(原註・三月九日佐久間正蔵紹介を為す)初めて業を木斎(原註・後寧斎と改む)奥野先生の門に受く。常に講席に陪し、幸に聖賢道学の指を聴くを得たり。

とあり、幼時より父の訓育を受け、やがて明和三年、十二歳の時に奥野寧斎に入門したことが知られる。寧斎もやはり大津の人、西依成斎の門弟であつて、ここに栗斎は本格的に崎門の学問を修めることとなつた。なほ、寧斎を紹介した佐久間正蔵は、大津代官所西組組頭、父の同僚であつた。

そして、『或問雑録』「はし書」に、自ら「いまだ弱冠ならざる時より兒童の師となりて、あけくれ句読を授けぬ」と述べる通り、栗斎は早くより子弟を教授する立場となつてゐた。また、二十二歳の安永五年には「盈科書院記」を書い

てゐる。この盈科書院は、撰津泉原（現茨木市）の村田季武（西依成齋門）が開いた私塾であつて、奥野寧齋がここに招かれて諸国の才子を教授してゐた。恐らく栗齋もこの書院で学んだ時期があつたものと思はれる。

栗齋は、後に西依成齋にも従学し、寛政九年に成齋が歿した際には「哭西依老先生二并小伝」を作つてゐる。さらに成齋門弟の松坊順専（号同人齋、祇園社社僧）よりも神道を学んだ如くである（「哭同人齋大徳」、また後掲の栗齋所講『神代巻師説』にも「先師松ノ坊ノ咄ニモ」云々とある）。なほ、書は京都の書家大谷永庵に学んでゐたことが知られる（「為小
林宗清一書」）。

さて、栗齋は三十歳頃に家を出て、学者として独立した。「四宮祭事所牽王母方朔之像置上文」は、大津市旧丸屋町（現中央二丁目）が、大津祭にて牽く西王母山の由来を記したものであり、これによると栗齋の居所は丸屋町であつたものと考へられる。この頃の詩に「戊申 此年復独居二首」（天明八年、三十四歳）があるので、左に掲げてみよう。

兪杖念殊恩 兪杖 殊恩を念ひ

菜衣作犬豚 菜衣 犬豚を作つ

人非世業拙 人は世業の拙きを誹り

隣厭吾伊喧 隣は吾伊の喧きを厭ふ

好劔尚豪氣 劔を好みて豪氣を尚び

談兵亦劇論 兵を談じて亦劇論

生平何所学 生平 何の学ぶ所ぞ

矢不掃公門 矢くは公門を掃はざらん

身辞造請静 身は造請を辞して静かに

家列市城喧 家は市城に列して喧し

相圃時観徳 相圃時に観徳し

董帷日講論 董帷日に講論す

少窺国史奥 少しく国史の奥を窺ひ

窃識我 王尊 窃かに我が王の尊きを識る

説得幽栖意 説き得たり幽栖の意

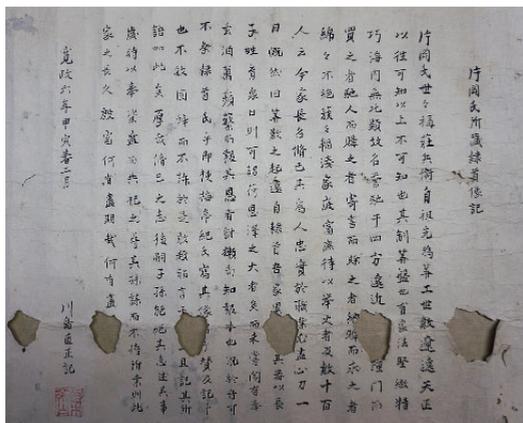
揮毫代晤言 毫を揮ひて晤言に代ふ

この詩には、公務を避け市中にて自適の講学に努めてゐた状が活写されてをり、また「国史の奥を窺ふ」ともあつて、『日本書紀』神代巻を始めとする国書にも深く沈潜してゐたことが窺はれる。

右の如く生涯仕途に就かなかつた栗斎ではあつたが、『撃壤集』には「復石原莊明府一書」「寄石莊明府一書」等、石原代官に対する文が多く収められてをり、屢々石原氏よりの諮問に應じてゐたことが知られ、代官石原正通が録した栗斎の『中庸講義』も伝はり、代官所への出講も多かつたものと思はれる。

栗斎は、算術にも秀でてをり、「祭田島定明文」に「予、算術を以て同志に授くる、亦三二百人を下らず」とあり、享和三年刊の『東海道人物誌』の大津駅の項には、「儒」「算術」として「川島専蔵」の名を挙げてある。栗斎は、「夫れ算数の理を熟玩すれば、則ち大極陰陽の妙、一本万殊の実、己を修め物に接するの要、読書講学の法、自ら其の中に具はる。」（送大西滝次婦讀岐序）との信念を述べてゐる。崎門では、三宅尚斎も数学を重んじていたことが知られるが、栗斎も天理の妙用を理解するために缺かせぬものとして算学を究めてゐたのであつた。

川島栗齋書蹟



(算盤師片岡家文書・天津市歴史博物館寄託)

大津ノ河嶋ヲ信向スル人ガアル。河嶋ハ西依ノ門人ナル奥野又一ノ門弟也。此西依デモ若林デモタゞ、綱齋先生丸々信仰シテイラル。綱齋先生トイヘドモアヤマリガアル。

云々と見えてゐる。晋齋は、三宅尚斎門の北澤遜斎に学んだ人で、文化七年に七十二歳にて歿してゐて、栗齋とは同時代人である。ここでは、浅見綱齋学統を批判的に述べてあるが、栗齋はその学系のうちにて一定の名声を得てゐたこと

さらに、武道の方面にては、前の詩にもあつた通り剣術を修め、後述する如く幼時より弓術も嗜んでゐたことが知られる。

さて、墓碑によると栗齋は実名を二度改めてゐるが、その時期について考へておかう。初名の「正臣」が用ゐられてゐる例は確認できないが、三十二歳の天明六年十一月に若林強齋の『笏訓訣』を書写した際の署名が「寛正」となつてゐるから、これまでに最初の改名があつたこととなる。また、同八年二月に歿した栗齋の室上田氏（後述）の墓碑には、「川島寛正室 上田氏之墓」とある。しかし翌寛政元年十月の「与佐野文甫書」の文中には「直正」と称してあり、その間に改名してゐることが分かる。或いは寛政改元（正月二十五日）を機に、「寛正」が年号に重なるのを憚つて改めたものかも知れない。

市井の学人として名聞を求めなかつた栗齋であつたが、当時の栗齋に対する世評の一端を挙げてみよう。京都の崎門派・小川晋齋の学談を記した『小川晋齋学話』⁽¹⁰⁾によると、

が窺へる。後述の如く、栗齋は、同じ望楠軒派の鈴木尋思齋（別号潤齋）の後を継いで闇齋点『五経』の改点、また『朱子行状』の改点も行つてをり、文化の初期、京都周辺に於ける同派の中核的存在であつたとしてよいであらう。

また文化四年二月、若林強齋が創祀し、奥野寧齋等が再興した近江多賀の垂加靈社の神体が紛失するといふことがあつたが、栗齋はその再祀に際して祭主を務め、祭文も撰してゐる（『祭垂加靈社文』）。

栗齋が精力的に門弟の教育に當つてゐたことは、多く伝へられてゐるその講義筆録によつて知られるが、晩年は病身であつた如くで、文化五年開講の『論語講義』の上原立齋識語には、

先生、晩年自ら謂へらく、桑榆漸く逼ると。是を以て毎講門人をして席上筆する所を淨写せしめて、先生これを手訂し、以てこれを後学に貽す。故に先生の意を失はざるなり。（原漢文）

しかし栗齋は、文化八年の夏、疾に伏し、同七月二十二日、五十七歳を以て歿した。傳光院先塋の側に葬られ、法諡を大音院覚翁直正居士といふ。それまで『論語』講義の他、『小学』と『日本書紀』神武卷も講ぜられてゐたが、これらも中途にして已んでしまつた。前掲『大津市志』の内堀英長（栗齋門人）の項には、英長宛の栗齋遺書が引かれ、

年来學術御熱心之事、珍重存候。其故拙者雖_レ歿後_レ先師相伝の講義并に蔵書類無_レ御遠慮、御持帰り御一見御筆等可_レ被_レ成候。尤も神書儒書講義之類、自_レ先師_レ以来非_レ其人_レ而不_レ伝事に候間、其御心得にて妄に他見等御許有_レ之間敷候。

とあり、学派伝来の講義録と蔵書は英長へ譲られたことが知られる。

さて、栗齋の性行については、既に近藤啓吾翁が『擊壤集』を評し、その詩は「清雅にして淡寂」、文は「その人物のごとく温雅平明、奇異を排し人の喝采を求めんとするの意全くなく」、正学を正しく解して身に行ずるの決意が常に

示されてゐる、と端的に述べられてある（前掲「川島栗齋『祝中島成章元服』詩について」から、ここでは栗齋の詩一首を掲げてその風懷を偲ぶこととする。

自負

安歩当車 晚食は肉

生涯富貴不干禄 生涯富貴 禄を干めず

勿謂病翁無世才 謂ふ勿れ 病翁世才無しと

広居仁里是景福 広居仁里 是れ景福

二、家族・門流・交友

○家族

ここでは、傳光院に現存する川島家の墓碑と檀家資料とに主として拠りつつ、栗齋の家族親族について述べよう。

栗齋の父は、名を正為といひ、専蔵、また惣右衛門と称した。前述の如く、『京都武鑑』に大津代官所東組同心目付として記載されてゐる「川嶋専蔵」「川嶋惣右衛門」は彼の事であらう。正為は代官石原氏の信任厚く、前掲の「賀^二大人致仕^一」によれば、寛政二年、七十歳に至つて骸骨を乞うたが、当時の代官石原正範は「吏事に老なると人の望とを以て」許さず、さらに一年を勤めた後、禄を辞した。翌寛政三年十一月五日歿、法諡は音響院自覚正元居士、墓碑には「川島正元正為墓 妻鳥居氏祔」とある。『或問雑録』によると、正為は栗齋七歳の時より自ら手習・素読を施し、その様子は「若ハ怠リ又ハ忘レナドスル時ハ、大ニ怒テ鞭ウチ追出シナド、少シモ容舍スルコトナシ」と、厳しいもので

あつたといふ。栗齋が学者として立つを得たのは、彼の鋭敏の才を認めた父の提撕あつての故であつた。

正為の室、即ち栗齋の母鳥居氏については、『或問雜録』に、

母モ亦、父ノ心ヲ心トシテ、ヨク教育ヲ加ヘ、戒メノ中ニ愛ヲ含ミテ、吾玄冬ノ比、夜イマダ明ザルニ起テ書ヲヨ
ミナントスルヲ知レバ、吾ヨリ早ク起テ茶ヲ煮、飯ヲツクリテ吾ニ与ヘ、或ハ草射ナド射ル時ニ、矢ヲ取モノナケ
レバ自矢ヲ取テ、怠ルコトナキヲ欲スルナド、諸事コレニナゾラヘ知ベシ。

と、子女を厳しく学ばせた正為の意に添ひつつ、愛情を以て養育に努めてゐたことが回想されてゐる。鳥居氏は文化元年九月二十八日、七十二歳を以て歿した。法諡は利善院元譽貞春大姉。

栗齋には前後二人の妻があつた。初めの室上田氏の墓碑は、前述の通り傳光院に現存し、天明八年二月二十二日に歿してゐる。檀家資料によれば二十二歳であつたことが知られ、従つて明和四年の生れ、栗齋より十二歳の年少であつた。法諡は享室利元信女。また墓碑の右側には「利暁童子」の文字を刻する。檀家資料には見えてゐないが、栗齋との間に早世した子があつたのかも知れない。

継室吉原氏は、名を千賀といひ、栗齋墓に耐されてゐて、その墓碑の右には「天保九戊戌年十月廿七日終」と歿時が刻まれてゐる。檀家資料には七十二歳とあるから、明和四年の生れ、前室上田氏とは同齡であつたことになる。法諡は量岳正寿信女。

栗齋と吉原氏との間には女子があり、名を富といつた。寛政二年に生れ、享和元年、十二歳にて早世してしまつた。法諡は貞周童女。栗齋に「悼長女富」の長詩があつて、悲嘆の情が綴られてゐる。

檀家資料によると、栗齋にはもう一人女子があり、吉原氏の所生と思はれるが、文化五年、十六歳を以て、やはり父に先立つて歿してゐる。法諡は白応貞玉信女。これにより栗齋の血統は絶えてしまつた。

栗齋の姉、名は不明であるが、『或問雜録』には「吾姉ハ猶更ニマサリテ、ヨク書ヲ讀、和漢ノ事迹ニモ委シカリキ」と記されてゐて、聡明の人であつた如くである。寛政八年に四十五歳にて歿してゐるから、栗齋より三歳の年長であつた。法諡は釈明淨信女。

弟正明は、栗齋より十一歳の年少にて、前述の如く大津代官所に出仕して惣右衛門の称を襲つた。天保三年の代官所記録である『西山町字大濱一件留』には、組頭として川島惣右衛門の名が頻出し、奥に「天保三千辰年冬 川島惣右衛門正明誌」と見える。¹²『撃壤集』に「秋日与レ弟」の詩を載せ、栗齋が借りた『風土記』を門弟と共に書写してゐる記事もある（『日本風土記序』）。また、文化六年に若林強齋の『神道大意』を書写してゐて、吏務の傍ら学問にも励んでゐたものと考へられる。天保七年五月十九日歿、七十二歳。法諡は白誉蓮香明重居士。

妹某は、檀家資料に「八丁尾張ヤ彦衛門嫁」とあり、墓碑には「松村氏室 川島氏之墓」と刻してある。栗齋の遺編を輯めて『撃壤集』を成し、その序文を書いてゐるのは、栗齋外甥の松村保定であるが、大津八丁の尾張屋彦衛門は松村氏にて、某はそこに嫁いで保定を生んだのであらう。寛政四年八月二日、二十五歳にて歿、法諡は覺月貞光信女。

檀家資料にはその後の川島家関係の記録が明治まで見えてゐるが、現在は無縁となつてしまつてゐる。

○門弟

次に栗齋の門人について見よう。まづは内堀英長である。大津の人、繁太と称し、石原氏の吏僚であり、その縁にて栗齋に学んだものであらう。代官所に仕へること三十九年に及んだが、石原代官の閨門治まらざるを力争して聴かれず、疾と称して去つた。後に若狭小浜藩酒井家に招かれて京に住み、天保三年歿した。年五十九。晩年は最も神道に意を用ゐ、その秘奥を極めた。栗齋からその蔵書を譲られたことは前述した通りである。¹⁴

上原立斎も栗斎門の高足であり、初め多胡氏、名は正福、甚太郎と称した。近江高島の人にて、後大津に住した。安政元年歿、年六十一。梅田雲浜が立斎の門に学び、その女婿となつたことは周知の通りである。

中村益斎は、名を誠之、通称を内記といひ、京に住み儒を以て鷹司家に仕へた。文政十二年に歿してゐる。『撃壤集』に「答中郎誠之」を載せてをり、九州大学坐春風文庫には益斎の『大学講義』が伝はる。

能勢自訟、名は明陳、郡兵衛、後軍治と称した。自訟はその号である。日向佐土原藩士にて、奥野淡斎・御牧赤斎にも学び、佐土原藩醫學習館の学頭となつた。明治二年、八十歳にて歿した。¹⁵子の直陳は山口菅山に学び、国事に奔走した。なほ、『崎門学脈系譜』¹⁶には同じ佐土原藩士の池上陳敬（隼之助と称す）を栗斎門弟としてあるが、彼は栗斎歿後の天保三年の生れであるから、上原立斎門弟とするのが正しい。陳敬は上原立斎が蔵する講義筆記類を纏めた『山崎学派師説筆記類目録』¹⁷を写し、これを直陳に与へてもをり、佐土原藩には栗斎の学問が強く影響してゐたことが知られる。

谷川士清の曾孫である清逸（綱介と称す）も、栗斎の門弟であつた。金本正孝氏旧蔵の『靖猷遺言講義』（若林強斎講）の白井胤良（伝未詳）識語には、『靖猷遺言』に関する栗斎の語を引き、これを栗斎門人の谷川清逸から聞いた旨が記してある。しかし、これ以外には栗斎と清逸との關係を示す資料を見出せてゐない。

到津通磨は、宇佐宮大宮司公古の子である。到津家は、望楠軒と深い關係を有してをり、公古は谷川士清・西依成斎に学び、通磨の兄公素も成斎に就いてゐる。同じく大宮司家の宮成公綏も士清・成斎に就学し、安永八年、京にて客死してゐるが、その墓碑銘は栗斎が撰してゐる。かうした關係より通磨も栗斎に入門したのであつたらう。後掲の栗斎著『念書法・読書法・日用功夫』は通磨に与へられたものであり、通磨が筆録した栗斎の『孟子講義』も伝はつてゐる。

木村政盈は大津の人、千之助、また忠次郎と称した。彼の書写・所蔵に係る写本群が九州大学附属図書館坐春風文庫の所蔵に歸し、栗斎のものも多く含まれてゐるが、これについては次章にて触れる。

その他、栗齋門人として、堀正美・堀正路・堀此長・谷謙吉・松山儀・古川立祐・小野可行等の名が確認できるが、何れもその伝を詳らかにしてゐない。さらに、遠く赤城から梁田某、讃岐より大西滝次が栗齋の許に遠遊してもをり、栗齋の名を聞いて各国より多くの学徒がその門を敲いてゐたことが窺へる。

○交友

栗齋の交友はそれほど広くなかつた如くであるが、『擊壤集』に見える名家を挙げてみよう。

まづ西山拙齋であるが、栗齋の「与_二小西梁山_一書」によれば、梁山の仲介によつて拙齋との面会の機を得てをり、「渴想頓に慰す」とあるから、栗齋は常に拙齋の学徳を慕つてゐたものであらう。

頼杏坪も栗齋宅を訪ねてをり、その際、栗齋は「奉_レ謝_三頼千棋大儒過_二訪弊廬_一」一首を詠んでゐる。ここでは再会を約してゐるが、その後の交友については未詳である。

同じ大津の画人・紀楳亭とも交渉があつた如くで、その還曆を祝した「賀梅亭紀氏六十初度」を詠んでゐる。また、伏見に住してゐた奥野寧齋の弟・淡齋とも親交があつた。

その他、京の儒家若槻幾齋、同じく医家村田仲龍（祐信）等との交流も確認できるが、詳細は割愛する。

三、栗齋の著作と講義筆記

次に、栗齋の著作と講義について概観してみよう。崎門の諸家は概して著述が少なく、儒書・神書の講義に力を注いだのであつたが、やはり栗齋も著作に比して講義が多く伝はつてゐる。特に、九州大学附属図書館坐春風文庫（楠本正

継氏収集¹⁸ には、栗斎の講義録が纏まつて蔵せられてある。ここには奥野寧斎や内堀英長関係のものも併せて伝はつてゐて、栗斎門人木村政盈の家に伝来してゐた蔵書群であつたと思はれる。

その他、千葉県図書館に所蔵されてゐる梅澤芳男氏（号思斎）の旧蔵書（蕪木文庫¹⁹）や皇學館大学附属図書館の所蔵となつた池上幸二郎氏旧蔵書計三五八冊中にも栗斎の講義類が含まれてゐる他、各所に伝来が確認できる。浅見綱斎学統の中では、綱斎・強斎に次いで多く講義筆記が残つてゐるのではなからうか。

以下、栗斎の著作より順次略説してみよう。

【著作】

○撃壤集 写 六卷一冊

栗斎の詩文集。無窮会平沼文庫本（請求記号九五八一、以下同）と近藤啓吾翁旧蔵本との両本が伝はり、詩は計二百六十六首、文は六十五篇を収めてゐる。栗斎外甥の松村保定の編に係り、彼の序文（文化十二年）によれば、矮楮片紙に存するのみであつた栗斎の詩文を巻と為し、栗斎の意を取つて『撃壤集』と題したといふ。序と目録には「川島栗斎先生撃壤集」とあり、内題は「川島栗斎先生詩文鈔」、外題は「栗斎集」としてある。

○喪葬私考 写 二卷

九州大学附属図書館碩水文庫（ソ／八）二冊、同坐春風文庫（三五／一六〇）二冊、小浜市立図書館酒井家文庫（崎五五五）一冊、近藤啓吾翁旧蔵二冊がそれぞれ伝はる。文化元年の自序があり、浅見綱斎『喪祭小記』と若林強斎『家礼訓蒙疏』との両著より抄出し、自らの意見を附したものである。仏葬及び徒らに儒礼に従つて「国家の制法」を乱してゐる儒家の葬礼を批判し、我が国に於いて行ふべき葬礼を簡便に説いてゐる。²⁰ なほ、下巻の「墓表」の項には、「墓祭

ヲ行コトハ追テ祭祀私考ヲ著シテコレニ載ント期ス」と見え、『祭祀私考』も企ててゐたことが知られるが、伝存を
確認出来てゐない。

○念書法・読書法・日用功夫 写 一冊

九州大学附属図書館坐春風文庫所蔵(三五/八五)。千葉県文書館山口巖家文書(ネ三二)にも一本を蔵する。九大本
の奥に「右一冊、豊之前州宇佐宮神官到津某に寄与す 淡海 川島直正」(原漢文)とあつて、到津通磨に与へたもの
と考へられる。日常の学問の心得が、和文にて簡潔に説かれてゐる。なほ、「念書」とは「俗ニ素読スルコトナリ。
念ハ口ニトナヘルコトヲ云ナリ」と説かれてある。

○或問雑録 写 一冊

無窮会平沼文庫所蔵(九五七九)。内田遠湖翁旧蔵本にて、外題に「川島先生或問雑録」とある。自撰の和文にて「或
問雑録はし書」を掲げる。成立年は不明であるが、晩年の編と思しく、学問の心得を問答体にて記したもの。

この他、前掲の『山崎学派師説筆記類目録』によると、『易程伝会稿』『読朱子文集』『読名臣言行録』『人心道心説』
『入塾条約』『宗法考』『淵源録校正』『易程伝校正』『二程全書校正』『上蔡語録校正』『詩集伝書入』『礼記集説書入』『論
語或問校正』が栗齋のものとして記されてゐるが、いづれも伝存を確認してゐない。

【講義】

○大学講義

同内容のものが、無窮会平沼文庫(九五八四、四冊)、長崎県立長崎図書館楠本文庫(二二三/D一六、二冊)、皇學館

大学附属図書館（二冊、長谷信篤筆録）にそれぞれ蔵されてゐる。また、東洋文庫に蔵する四冊は、利・貞の二冊は他の三冊と同内容であるが、元・亨の二冊は別内容である。元冊の冒頭及び亨冊の表紙に「栗齋先生」と記されるが、亨冊には後人の筆にて「又ハ強齋先生カ」との書入がある。

○論語講義

本講義については、近藤啓吾翁前掲「川島栗齋所講『論語講義』について」に詳しい。学而篇より里仁篇までの五冊が無窮会平沼文庫（九五八七）に蔵され、近藤翁旧蔵甲本（学而篇より述而篇まで）・乙本（先進篇より堯曰篇まで）各七冊も伝はる。さらに、長崎図書館楠本文庫（二二三／R六六）にも十七冊本がある。これは第一冊のみが浅見綱齋の元禄十四年の講義となつてゐて、やはり完本ではないが、第二冊以下は、無窮会本・近藤翁甲乙本と同内容である。さらに他本に缺く泰伯・子罕・郷党の三篇を含んでゐる。近藤翁乙本と楠本文庫本には、前引の上原立齋による識語があり、それによると本講義は文化五年三月に開講され、自らの健康に不安を抱いてゐた栗齋は、精確な講録を後学に貽さんと、毎講門人に筆録を浄書させ、自らこれを訂したといふ。しかし同八年、栗齋の易簣により、顔淵篇の中途にて講義が止つたため、以下は享和元年の論語講義を以て補つたのであつた。

○孟子序説講義

一冊、筑波大学附属図書館所蔵。外題に「川島栗齋先生説孟子序説講義」扉に朱筆にて「享和元辛酉夏六月十一日開講」とある。栗齋門人到津通磨の朱印があり、彼の筆録に係るものと考へられる。

○孟子講義

一冊、坐春風文庫所蔵（三五／一〇三）。未浄書にて、表紙に「川島先生孟子」とあり、享和二年五月十一日より八月六日に至る公孫丑上以下四篇の部分的な講義である。筆録者は木村政盛と思はれる。

○中庸講義

無窮会平沼文庫に三冊本（九五八五）と一冊本（九五八六）、筑波大学附属図書館・長崎図書館楠本文庫・千葉県文書館に各一本（いづれも三冊）、近藤啓吾翁旧蔵本（中・下の二冊）の計六本が伝はる。筑波大本の外題には「川嶋栗齋先生 中庸講義」とあつて、冒頭には「文化五年戊辰九月廿三日開講」と見え、栗齋晩年の講義である。また、無窮会三冊本の巻尾には、大津代官石原正修の識語があり、父正通の所録であることと、第三十二章以降の亡失部分を寛政六年の栗齋講録（中村益齋筆記）によつて補つた旨が記されてゐる。

○中庸輯略講義

二冊。内田遠湖翁旧蔵にて近藤啓吾翁に贈られしもの。上冊の見返しに遠湖翁の朱筆にて「川島栗齋講義」とあり。講義の時期、筆録者は明らかではないが、天人一致や鬼神に関する箇所には神道説を引き、栗齋講説の特色がよく表れてゐる。

○詩経講義

二十卷三冊、無窮会平沼文庫所蔵（九五八二）。外題に「川島栗齋先生詩経講義」とあり、内田遠湖翁の旧蔵である。また、長崎図書館楠本文庫に同内容の十冊本を蔵する（二二三／SH三四）他、近藤啓吾翁旧蔵の『強齋先生詩講義』（全十冊のうち第十冊を缺く）は、第一冊のみ若林強齋の講義にて、第二冊以降は無窮会本・楠本文庫本と同文の栗齋講義となつてゐる。

○近思録講義（甲）

十一冊、坐春風文庫所蔵（二三七）。外題に「栗齋先生近思録講義」とあり、第三冊為学上の巻頭に「寛政十年戊午十月八日」とある。文庫の目録にては服部栗齋講述としてあるが、随所に若林強齋の説が引かれ、後述する如く我が

国の神道説を以て講説が進められてゐる箇所が多く、川島栗齋の所講として誤りあるまい。なほ、本講義と同内容の近思録目録及び道体篇の講録一冊が無窮会平沼文庫（九五七八）に収められてあり、巻尾に「門人内堀英長席上之録」とある。

○近思録講義（乙）

十冊、坐春風文庫所蔵（三五／七八）。第一冊と第二冊の道体篇は、若林強齋の講義、第三冊以下の八冊が栗齋の講義（外題に「近思録講義 栗齋先生辨」とある）となつてゐるが、甲本とは別内容である。これも目録は服部栗齋所講とするが、強齋説が多く引かれてをり、川島栗齋のものとしてよい。

○小学講義

六冊のうち第四冊を缺く。京都大学附属図書館所蔵（六九／シ／一〇八）。外題に「栗齋先生 小学講義」、巻頭に「川島栗齋先生講義」とあり、「文化七年庚午二月五日」と開講の日付を記す。第六冊敬身篇・明威儀之則の末尾に「是に至り先生歿して此の講休む。復た此の録を成すべき無し。是に於いて一二の同志と前日所講の録を採り、以て之を補ふこと左の如し。」（原漢文）とあつて、成立の事情が知られる。

○小学内篇講義

一冊、坐春風文庫所蔵（三五／一〇〇）。外題に「川島先生小学内篇」、裏表紙に「壬戌三月十有九日、同八月上ノ四日ニテ終 木村氏」とあり、木村政盈筆録、享和二年の三月から八月にかけて講ぜられたものである。なほ、九大碩水文庫（シ／八五）にも三冊本を蔵するが未見である。

○小学口積聞書

一冊、坐春風文庫所蔵（三五／一〇〇）。外題に「川島先生小学口積聞書」、表紙に「文化元甲子年三月初会 木む

ら氏」とあり、これも木村政盈の筆録と考へられる。

○四箴附考講義

一冊、桑名市立中央図書館秋山文庫所蔵。外題に「川島栗齋先生講義 四箴附考聞書」、巻頭に「文化六己巳八月廿四日宵」とある。奥には「原思軒源就熙敬記」と見え、奥野就熙、すなはち淡齋の書写に係るものと思はれる。なほ、慶応義塾図書館と皇學館大学附属図書館にも同本を蔵するが、皇學館本は附考の講義を缺いてゐる。

○白鹿洞講義

一冊、坐春風文庫所蔵（三五／一四六）。未清書にて、目錄は服部栗齋講述とするが、巻頭に「文化五載戊辰秋南呂二十一日開講」と見え、寛政十二年に歿してゐる服部栗齋は講者ではあり得ない。序文の講義中に「綱齋先生ノアラワサレタ白鹿洞揭示考證ト云テ一巻アル故、夫レヲ求メテ吟味スルガヨイゾ」とも見えるから、川島栗齋の講義と断じてよからう。なほ、未見であるが、無窮会神習文庫に文化五年「川島先生述 元迪筆記」の『白鹿洞揭示口義』一冊を蔵してをり、年紀よりして同内容のものかと思はれる。

○敬齋箴・主一箴講義

一冊、千葉県文書館所蔵（山口節家ケ／七三）。外題に「川島栗齋先生 敬齋箴 主一箴講義」とある。敬齋箴及び同序・附録の講義と、主一箴の講義とが合冊されてゐる。講説の年次、筆録者等は不明である。

○西銘講義

一冊、千葉県文書館所蔵（山口巖家ネ／二三）。外題に「栗齋先生辨 西銘講義」とある。講義の年次、筆録者等は不明であるが、「仙寿院蔵書」の朱印記がある。仙寿院は、御医として朝廷に歴仕した山科家の称であつて、次項の『性論明備録講義』も同じ印記を有する。また、同家の元晃・元強父子が、文政六年に栗齋門弟中村益齋所持本を借りて

筆写した浅見綱斎の『劄録』が九大碩水文庫に収められているから、山科家は望楠軒学派と密接な関係を持つてゐたことが知られる。

○性論明備録講義

一冊、千葉県文書館所蔵（山口巖家ノ／＼二六）。外題に「栗斎先生辨性論明備録講義」とある。「仙寿院蔵書」の朱印記あるも、講義の年次、筆録者等は不明である。

○楚辞聞書

五冊、坐春風文庫所蔵（三五／八四）。外題に「栗斎先生楚辞聞書」、巻頭に「寛政己未六月五日開講」、巻末に「享和元年六月廿五日滿講」とある。これも目録では服部栗斎講述となつてゐるが、この年記や、講義中に若林強斎の説を引いてあることよりして川島栗斎の講義と断ぜられる。筆録者は不明であるが、「上原氏家蔵書」の印があり、上原立斎の蔵する所であつたと思はれる。

○靖献遺言講義

五冊、無窮会平沼文庫所蔵（九五八三）。第一冊の外題に「栗斎先生 靖献遺言講義」とあり、見返しに内田遠湖翁の筆にて「川島栗斎講述」とある。但し冒頭に「先師綱斎先生ノアラハサレテ」云々とあつてやや不審ではある。なほ、荒木見悟氏の「拘幽操」の足跡（『明清思想論考』研文出版、平成四年に所収）には、栗斎の『靖献遺言講義』の発端が引用されてゐるが、無窮会本には見えない内容となつてゐる。

○神代卷講義

六冊のうち第一冊を缺く。東京大学宗教学研究室所蔵。外題は「神代卷上講義」（第二、四冊）、「神代卷下講義」（第五、六冊）。各巻の扉に「川島先生清々翁講義」とあり、巻末に嘉永三年七月一日の三上景文（『地下家伝』の編者）の識語

がある。

○神代卷師説

三冊、皇學館大学附属図書館所蔵、松浦伯爵家旧蔵。外題は「神代卷師説」。講者は明記されていないが、次項の『神武卷講義』と同体裁・同筆であり、内堀英長筆記と考へられる。講義中に「守中翁」（若林強斎）・「西依成斎翁」「滝川翁」（奥野寧斎）の説が引かれてをり、栗斎所講と断じて誤りないと思はれる。

○神武卷講義

一冊、架蔵。松浦伯爵家旧蔵にて、『神代卷師説』と首尾を為すものと考へられる。卷末に「右神武卷ノ説ハ蓋清々翁説ク所ニシテ、翁コ、ニ至リテ病篤シ。故ニ講説スルコトアタハズ、コノ所ニテ講ヤムト云爾 文化八年辛未秋九月内堀英長記」とある通り、栗斎最晩年の講説にて、長髓彦伏誅の段にて終つてゐる。

右の他、『山崎学派師説筆記類目録』によれば、栗斎の『洪範』『孝経刊誤』『仁説問答』『拘幽操』各講義も蔵されてゐたことが知られるが、伝存を確認出来てゐない。

また、蕪木文庫の目録には、栗斎の朱子行状講義（三冊）と中庸講義の別本（一冊）、西銘解師説（一冊）、近思録講義（十一冊）も見えてゐるが、⁽²¹⁾これも所蔵を確認出来てゐない。

さらに、西依成斎・鈴木遺音・中沼葵園等、望楠軒学派の影響が大きかつた隠岐にも、栗斎の講義筆記が伝存してゐる如くであるが、⁽²²⁾未見である。

【その他】

○拔湖古碑

写一冊、坐春風文庫所藏（三五／二二六）。外題に「川島先生拔湖古碑」とある。近江塩津の拔湖古碑の碑文・異姓名・太平記齟齬等の項目からなる雑記である。

○栗齋手沢『延平答問』

刊二冊、無窮会平沼文庫所藏（九五八二）。内田遠湖翁の旧蔵に係り、栗齋の識語によれば、享和元年、奥野淡齋より「綱強二先生の考評重訂する所の書」（原漢文）を借り、その語を正保四年刊本の上欄・行間に書入れ、さらに自按を加へたものである。なほ、この書入れの転写本が千葉県文書館に蔵されてゐる（山口節家フ／六三）。

○闇齋点『五経』

文化二年刊（但し版心には「享和再刻」とある）全十一冊。山崎闇齋加点と称して夙くより行はれてゐたものの改点版であるが、その『周易』の表紙裏に、

嘉点五経の行はるるや久し。然るに其の実は則ち雲川子の改定する所にして山崎先生の親ら点ずる所に非ざるなり。是を以て往歳、鈴木先生其の簡要ならざる者を改正し、未だ上木に及ばず、忽焉として易簣す。今其の書を以て本と爲し、雕刻已に成りて尚以て足れりとせず、更に再校を川島先生に請ふ。先生乃ち先賢の定むる所に据り、先賢の点法に従ひ、卒に此の書を成す。珷玞混ぜず、崑玉光を倍す。実に訓点の精、此れに加ふる無き者と謂ひつべし。唯だ恐らくは、四方の君子、其の旧刻に異なるを怪まんことを。故に然る所以を書し、以て之を謹告す。中邨貞固堂刻（原漢文）

とあつて、改版の事情が知られる。鈴木先生は尋思齋、別号潤齋、西依成齋の門人である。寛政三年、郁文堂版『詩

『經集註』『書經集註』（松永昌易点）にも改点を施してゐる。彼は文化二年に歿してをり、ここにいふ「川島先生」は、同門の栗齋として誤りあるまい。従つて、閻齋点『五經』の改点に栗齋の与る所大であつたとしてよいであらう。

○改点『朱子行状』

京都の書肆朝倉義介（助）及び江戸の須原屋平助・大坂の泉本八兵衛との合板にて、『朱子行状』一冊が文化元年二月に刊せられてゐる。義介の出版目録には「朱子行状 川嶋改点」と見えてをり、栗齋はこの『朱子行状』文化刊本の改点にも携つてゐたものであらう。

四、栗齋の学問思想一斑

○思想形成と講義の特色

ここでは、栗齋の学問思想を概観する。まづは、栗齋が如何にして程朱の学を信ずるに至つたのかについて考へよう。彼の著『或問雜録』によれば、漢土にも漢儒・程朱・元明諸儒の説あり、我が国にも徂徠学・伊藤の古学・中江の心学等の諸説あると述べた上で、

予モ若年ノ比ハ諸儒ノ説ヲヨミテ、皆面白ク是非ワキガタカリシガ、性質ノ不敏ナルヨリ、他ニウツルコトナク、一筋ニ程朱ノ説ヲ信ジ、コレヲ守ルコト多年ナル故ニ、今日ニテ前日ノ面白カリシ諸説ヲ顧レバ其ヒマスキマ著レテ、取ベキコト少ク、孔孟ノ正脉、只程朱ニ在コトヲ少シハ心得タリ。

と述べてをり、若年には他派へ関心を持つこともあつた如くであるが、それに迷ふことなく一貫して程朱学の講究に努め、その正学なることの確信を固めたのであつた。早くより奥野寧齋に就いたこともあり、程朱学への尊信は当然の帰

結であつたらう。

栗齋は、寛政三年、幕府が林家に対し異字を禁すべきことを命じた布達を写した際、門弟にかう述べてゐる（『与山儀生二文』）。

但し真に朱学の正しき所以を知る者、蓋し鮮し。此の書を読み始めて朱学を信じ、異学を棄る者は唯能く面を革むるのみ。真に朱学の正しき所以を知る者に非ず。真に其の正を知る者は、官府命ずるに偽学を以て之を禁ずと雖も而も顧みず、衆人誣するに禅見を以て之を議すと雖も而も惑はず。

ここには、正学の正学たる所以は、幕府の制令に左右されるものではないとし、正学を一貫して奉じてきた学者としての矜持と信念とが示されてゐる。

次に、栗齋の思想を、主にその講義筆記より見ることにしよう。近藤啓吾翁は、栗齋の『論語講義』を詳細に解説せられて、山崎闇齋・浅見綱齋・若林強齋の講説を祖述しながらも、それに盲従せず、批判すべきは批判し、厳格精密・親切公平の態度を以て三先生の学風をよく守るものであつたと評されてゐる（前掲「川島栗齋所講『論語講義』について」が、その姿勢は、他の講義にも共通してゐるものとしてよい）。

また栗齋は、強齋を始めとする門流の講説蒐集に努めてをり、今に伝はる『大家商量集師説』（酒井家文庫）・『大学序講義』（酒井家文庫・坐春風文庫他）・『感興詩講義』（坐春風文庫）は、いづれも未浄書のまま高宮の小林家（強齋門流）に伝へられてゐた強齋の講義を、栗齋が苦心の末に解説整頓したものである。また、小川晋齋に請うて『洪範全書統録』に関する強齋及び三宅尚齋の資料を入手してゐる²⁴。かくの如く、栗齋は崎門先学の講義を博く参照し、伝来の学問の継承と發揮とを期してゐたのであつた。

そこで栗齋の厳格精密なる講義の実際を見よう。以下は『中庸講義』中冊にある第十二章「君子之道費而隱」の「費」

字についての講説である（引用は近藤啓吾翁旧蔵本による）。

先コノ費ノ字ハツイヤストモ訓デ、ツイヤスト云ハ使ヒツブシクシテ勘定ナニシ使フテシマウコト。（中略）何ノ算用モナシニ無正ニ使フテユクガ費ト云者ジヤガ、今日天地万物ノナリヲミルニ、ソレト同コト。先井ノ水デ云ヘバ茶ノ水ニモ使フ、洗ヒ水ニモスル、風呂ノ水ニモ汲コメバ庭ヘモマクト云様ニ、アノ朝カラ晩迄使ヒツブシクシテ遂ニ井戸ノ中ヘモドシタト云コトガナイ。ソレナラバ水ガ乾テシマウタカト云ヘバ、アトカラハ沸キ出シクシテイツ止モ止コトナイヲミタガヨイ。（中略）人ノ上デ云ヘバ何程死デモ後トカラハ生レテヤマズ、髭ヲ剃リ爪ヲ剪テモ其アトカラ伸テヤマズ、舜ノ如キ親ニ孝行ナ人ガアルガ又引ツゞイテ曾子ジヤノ閔子騫ジヤノト云孝子ガ出テヤマズ、伯夷叔齊ノ如キ忠臣ガアルトソレカラ屈原ジヤノ孔明ジヤノ文天祥ジヤノ楠正成ジヤノト云様ニ追々ニ忠臣ガ出テヤマズ。（中略）何ト夥イ幅モ限モナイコト。ソレガ皆メツタ無正ナコトカト云ニサウデナイ。メツタ無正ナコトナラバ、時々ハ火ガ流テ水ガモユルノ、梅ニ桜ガ咲テ鶯ガ雀ノ様ニ鳴ノト云様ニアリソウナ者ナレドモ終ニサウ云コトハナイ。柳ハ緑、花ハ紅、火ハ燃テ通り水ハ流テ通ル。カノ率性ノ道ナリニトメドモナウ流行スル所ヲ見タガヨイ。コ、ガ費ト云モノ。

かくの如く、道の広大無辺の状を、懇切ではあるが冗長に亙らず端的に、また的確な比喻を交へて語つてゐる。かうした内容は、広く見れば崎門の講義に共通するものともいへようが、例へば綱齋・強齋の講義には当時語や方言的な表現が多く現れ、やや生硬の印象を感じるのに比して、栗齋の講義にはさうした表現は少なく、洗煉されてゐる感がある。かうした点は栗齋の講義が多く写された所以であり、内田遠湖翁が、『論語』を講ずるに際して、栗齋の講義を種子本としてゐたといふのも頷ける所である。

次いで華夷名分についての講説を挙げておかう。『論語講義』第十冊・子罕篇子欲居九夷章には（引用は長崎図書館所

蔵本による)、

徂徠ノ如キ名分大義ヲ知ラヌ儒者ハ、アノ方ヲ中華中国ト称ヘテ、吾国ヲ東夷ナド、称ヘルガ、先第一朝廷ヘ対シテ恐レ入りタコト。兎角後世儒学ヲスル者ハ、アノ方ノ書計リ読デ吾国ノ書ヲ読ズニヨリテ、イツトモナフアノ方ノ書ニカイテアルコトガ主ニナリ、吾国ノ尊イイト云コトヲ知ラヌ者ガ学者ノ中ニ多イモノ。ソレデ学問ハ経書ハ天地自然ノ道ヲ書タモノデ、天地ハモト同ジ天地ジヤニヨリテ、道ニ於テ和漢古今ノ違イハナイモノ。歴史ハ先吾国ノ六国史ナドヲ第一ニ見テ、ソノ次ニアノ方ノ歴史ヲ読ガヨイ。ソレデハ本ガ明カニナルカラ吾国ノコトニ迷ヒガナウテ名分ヲ失フコトガナフテヨイ。

とあつて、内外の別を説くと共に、国史を読むことを優先すべしといひ、さらに、

日本カラ云ヘバ吾国ヲ中国ト称シテ、ソノハタマハリノ国ヲ夷ト称スル。サレバコソ吾国ノ古ハ葦原ノ中津国トモ云テアリ、今ニ日ノ本トモ称ヘルコトデ、別シテ君臣ノ道ノ万国ニ勝レテ立チ貫イタ国デ、抑天地開闢ヨリ今日ニ至ルマデ天子ノ御正統ハドコマデモ動クト云コトハナイ。ソレデ君ハ神孫、国ハ神国ト云テ、天ノ神ノ御末ノ国ト云ハ吾国ニ越ルハナイ。サウ云尊イ国ニ生レテ吾ト吾手ニ東夷ノ人ジヤナド、自カラ夷ニナルト云コトハ至テ文盲ナ物ヲ知ラヌト云モノ。

と説いてある。これは綱齋の中国論以来、同門流の常套ともいへる内容であり、栗齋の独自色は薄い、名分を正し、皇室を奉ずる我が国の尊厳を説く態度は、栗齋によつて明確に継承されてゐたのである。

○神道説

次に、栗齋の神道説について見ることにしよう。栗齋は、前述の如く、三十六歳の天明六年に若林強齋の『笏訓訣』

他を、翌年には西依成斎の『中臣祓講義』を筆写してをり、早くより神道に関心を持つてゐたことが知られる。また、坐春風文庫には、『神道五部書』やその註釈、強斎の『神道大意』『神道劄記』、さらに『神代文字』といった栗斎が書写所持し、内堀英長へと伝へられた神書群が蔵されてをり、栗斎が神儒兼学の風をよく守つたことが示されてゐる。

栗斎の神道関係講義としては『神代卷講義』『神代卷師説』があるが、そこに於いても闇斎・強斎・西依成斎・奥野寧斎の説が多く引かれてゐる他、玉木葦斎や松岡雄淵等の神道派の説も広く参照され、栗斎の研究成果が盛込まれてゐる。

栗斎の神道に対する基本的な姿勢は『神代卷講義』に左の如く示されてゐる。

固ヨリ道ハ天地公共ノ道デ、唐ノ道デモナク吾邦ノ道デモナク、天地開ケテ人ガ生ル、ヤ否ヤ自然ト人ニハ人ノ道ト云モノ、具ルガ、猶天下中ノ水ハ尽ク湿シ、天下中ノ火ハ尽ク熱イヨウナモノ。儒書ガ渡リテ道ガ開ケタナド、云ハ弁ズルニモ足ヌ妄説ト云モノゾ。

ここにて栗斎は、道とは唐の道でも日本の道でもない「天地公共ノ道」であり、従つて天地開けてより自然に具はつてゐるものとする。かうした立場は、神儒の「習合」を否定し、両者の「妙契」を説く山崎闇斎よりは、「理一」を根拠として習合も妙契も否定し、神儒一致を説く浅見綱斎と近似してゐる。その上にて栗斎は、「道」が実現されてゐる我が国の尊貴性も説く。すなはち『神代卷師説』下冊・天孫降臨の段にて、天壤無窮の神勅について、公の道に反した「欲ノ深イ」ものとしたり、神道者の如く祝言とするやうな解釈はみな非なりとし、

吾国ノ帝王ト云ハマコトニ天ノ神ノアマクダラセラレタ、ソレナリノ皇統ジヤニヨリテ、アノ方ノユズリノキウスル天子トハ訳ノチガツタコト。欲デモ徳デモナイ、天カラ臍ノ緒ノツバイテアル帝位ノコトナレバ、ドウモコレガ外ノ者ノツグベキ道理デナク、ウカウベキ訳ハナイコト。吾子孫可王之地ト云敕命ガイヲ、タコトバデモ、イ

ノリタコトバデモ、欲ノ深イコトバデモナイ。コレガ正統正面ノアタリマヘノヲコトバト云モノ。君臣ノ一ツガウゴクト云ト、父子モ夫婦モ長幼モ朋友モミナクズレル。五倫イヅレヲロカハナイトハイヘドモ、アトノ四ツハメシク一分シニカ、ルコト。君臣ノ一倫ハ惣タバネトナリテ天下ニカ、リテアルコトユヘ、君臣ノ位ガカワラウナレバ天ガ下モニヲチテ地ガ上ミニアガルヨウナモノデ、万物ソウクズレト云モノ。ソコデコノミコトノリガ吾国根本ノ立ツトコロ。

と講じてゐる。五倫のうち君臣を根本とし、天地開闢以来、一系の皇統を今に戴く我が国こそが道義の中心であることが示されてゐるが、やはり道徳的解釈が前面に出たものとなつてゐる。

さらに、『詩経講義』周頌・清廟詩の講義では、

此方デ神道くト云ト、妙用詮義ニナリ、本法ノ神道ト思フテキル。皆ソデナイコトゾ。論語ニ、子路ノ鬼神ニ事フルコトヲ問ハレタレバ、未ダ人ニ事ルコト能ハズ、焉ゾ能鬼ニ事ヘント仰ラレタ様ナ処デトクト味ハフテ、神明ニ事ル旨ヲ合点シタガヨイゾ。今日人道当然ノ忠孝仁義ヲ離レテ外ニ鬼神沙汰モナイコト。今日人道トツレ立ツトト。

と説き、栗斎は当時の神道説を、人倫から遊離した「妙用詮義」に墮してゐると認識してゐた如くであり、『中庸輯略講義』にも、天人一致を講ずる段に、

又神道者ノ天人一致ノ伝ヲ立ルニモ了簡チガイガアリ、天ヲカタルハ人デカタリ、人ヲカタルハ天デカタル、コ、ヲ天人一致ニカタツタモノト云カラ、今日人道ヘヒタト天ヲモテキテカタリ過ル。天ヘ人ヲモテイテカタツテハニツコラシウナシ。人ヘ天ヲモテキテハ天ズツテ人道当然ノ切ナスチガヌケル。

云々と、垂加神道にて重視される「天人唯一」の伝をめぐつて「神道者」への批判が見えてゐる。かうした栗斎の姿勢

は、儒学を軽視し、秘伝秘儀の世界に傾かんとしてゐた垂加派諸家を意識したものであらう。かうした批判も既に浅見綱齋・若林強齋に見える所であり、特に強齋が垂加派の玉木葦齋等に対して示してゐた態度を引継いだものである。

ただし、栗齋は、神道を「人道当然ノ忠孝仁義」から離れてはならない「天地公共ノ道」とする道徳的神道観を持ち続けた如くであり、これは近江の滝津亭にて祓を實踐した晩年の強齋の如き宗教的境地には達せず、より綱齋の立場に近い位置にあつたといふことができよう。

さうした栗齋の意識は、儒書の講義にも反映され、その中の随所に神道説が引かれることとなる。これについては、既に拙稿に少しく述べてあるが、改めてその実際を見ておかう。

まづ『近思録講義』（甲）卷一の道体篇、鬼神を講ずる段を見ると、

雪ト云ト人ノカラダガガタ／＼トフルフト云ホド寒ス、風ト云ト戸障子モガタ／＼ト鳴ラスト云様ニ動カス、アノ風ノ中、雪ノ中ニ死物デナイ畏ルベキ所ノアルヲ鬼神ト云。畢竟上ノ帝ト云ノ使ヒモノ、其故ニ此方デ云ヘバ天御中至尊ハ上帝、級長津彦命ハ風ノ神、句句廻馳ハ木ノ神ト云様ニ天地造化ノハタラキヲナス一物／＼ニツイテ畏ルベキ活キ／＼トシタ所ノアルヲ鬼神ト云。

とあり、我が国の神名を挙げて造化の活物たることが述べてられてゐる。

次いで存養篇では、程明道の「学者、全く此の心を体せよ」の語を説いて、

吾国ノ神道デ大己貴尊ガ神靈ヲ三室山ニトゞメントヲ、セラレタモ、ミムロハ三ムクロト云コトデ、此カラダノコトヲ云。乃今三輪ノ御神体ハ山デ、ミムロ山ニ神靈ヲトゞメラレタト云ハ、吾国神代ノ心法ヲツタヘタモノデ、此全体心ヲ体スルト云ハ、ナンノ道デモハナハダ大事ノコトゾ。

と、我が心を外物に奪はれざらんとする修養を、神代巻に見える、大己貴命が自らの幸魂・奇魂を大和の三輪山に封じ

たといふ記事と対応させ、これを「吾国神代ノ心法」であるとしてゐる。

この『近思録講義』は、栗齋四十四歳の時に講ぜられてをり、栗齋が儒書講義中に神道説を語ることは、早くより行はれてゐたことが知られる。この他、治体・治法・警戒・聖賢の各篇、さらに『詩経講義』や『中庸輯略講義』等に於いても、神道への言及が散見してゐる。

さらに、栗齋は神道書講義中に儒書を引いてもをり、例へば『神代卷師説』上冊の天地開闢の段にて、「日月ニハ日月ノ神靈」が宿る如く、人間各々にも天神の分靈が宿ることを述べて、

ソコデ面々一分ノ上ヘデイヘバ吾身ニ此天地ノ神靈ガヤドラセラレテゴザル。ソレヲ平生ニミガイテ、クラマヌヤフニトスルヲ儒書デハ致知ノ工夫ト云。コノ神靈ヲソコナウモノヲ、カチサリテソコナワヌヤフニスルヲ克己ノ工夫ト云。コノ神明ノウセヌヤフチラヌヤフニト守ルヲ存養ノ工夫ト云。今様ニ儒書ヲ引ツケテトクコトハセヌコトケレドモ、端的親切今日ノ受用ニシテ、ドウモ面々ノコノアリガタイ神靈ヲ天地ヨリウケテモチテイナガラ、コレヲソマツニシテハナラヌコトライヘバ右ノ通りニトキワケネバナラス。

と、天神から授けられた自身の神靈を清浄に保つことと、克己致知の工夫とを並べ説いてゐる。このやうに、栗齋は、儒書を講ずる際に神書の旨を、さらに神書を説く上にも儒書の旨を用ゐるといふ方法を採用してをり、これは望楠軒学派中に於いても特色ある講説としてよいものと思はれる。

神儒の「習合」を否定し、両者の間には自ら「妙契」が存するとする山崎闇斎は、儒書の講義にては神道を語らず、神道の講義にても儒書を引付けなまいといふ態度であつたと伝へられるが、若林強斎は「モ一度ナイコト」と断つた上に『大学序講義』を神儒を交へて行ひ、神儒の本原が一貫してゐることを明瞭に説いてゐた。この講義録を編したのは栗齋であり、彼もさうした方法を取り入れつつ、より自在の講義を行つてゐたのであつた。これは儒書と神道とを安易

に結合する「習合附会」の態度ともいへようが、儒道と神道との通底を強調し、両道の分離を回避せんとする、栗斎なりの神儒妙契理解が示されたものと見たい。

結 語

以上に見来つた如く、川島栗斎は、山崎闇斎派、特に浅見絅斎・若林強斎の学問を継承し、西依成斎歿後は望楠軒学派の中核として活躍した学者であつた。広く読まれた彼の講義筆記は、崎門の精髓をよく發揮すると共に、儒学と神道とを巧みに織り交ぜ、両者の妙契を明らかにする特色ある内容であり、闇斎以来の神儒兼学に新境地を開いてゐたものとしてよい。この栗斎によつて中継された学問思想が、やがて幕末の梅田雲浜、あるいは佐土原藩や隠岐の志士に引継がれ、望楠軒の名を高からしめたのである。

最後に、栗斎の辞世詩「病臥覚_レ不_ニ殆起_一 因口占_三首_一」のうちの一首（掲げ、この篤実の学者の伝を了へることとする）。

名医調薬術弥工 名医薬を調して術いよいよ工なり

工不応知天命終 工なれども応ぜず 知んぬ天命の終るを

良友如求我生久 良友もし我が生の久しきを求めば

起興斯道述無窮 斯道を起興して無窮に述べよ

附・川島栗齋年譜

年次・年齢	事項	関連事項
宝暦五年 乙亥 一歳	○九月二十四日、生る	○宝暦の饑饉
宝暦六年 丙子 二歳		○七月、頼杏坪生る
宝暦八年 戊寅 四歳		○宝暦事件
宝暦十二年壬午 八歳		○二月十九日、北条定齋生る ○七月十二日、桃園天皇崩御。宝算二十二 ○七月二十七日、後櫻町天皇踐祚
明和二年 乙酉 十一歳	○弟正明生る	
明和三年 丙戌 十二歳	○三月九日、奥野寧齋に入門す	
明和四年 丁亥 十三歳	○妹某生る	○十二月五日、竹内式部歿す。年五十七
明和五年 戊子 十四歳		○村田季武、撰津泉原に盈科書院を開く
明和七年 庚寅 十六歳		○六月十四日、小野鶴山歿す。年七十 ○十一月二十四日、後桃園天皇受禪

明和九年 壬辰 十八歳		○三月、大津代官所再置さる
安永三年 甲午 二十歳		○八月四日、内堀英長生る
安永五年 丙申 二十二歳	○四月十六日「盈科書院記」	○三月十二日、石原正顕歿す。年八十三 ○六月二十三日、石原正範、大津代官に任ず
安永八年 己亥 二十五歳	○「宮成大宮司公綏碑文」 ○三月十五日「祝中島成章元服并引」	○正月三日、宮成公綏歿す。年四十二 ○十月二十九日、後桃園天皇崩御、宝算二十二 ○十一月二十五日、光格天皇踐祚
安永九年 庚子 二十六歳		○七月十一日、大谷永庵歿す。年八十三
天明二年 壬寅 二十八歳	○八月、月食、詩あり	
天明三年 癸卯 二十九歳	○九月十一日「四宮祭事所牽王母方朔之像贖上文」	○十一月十三日、松岡雄淵歿す。年八十三 ○天明の大饑饉、これより天明八年に及ぶ
天明五年 乙巳 三十一歳	○五月十五日「題覆甕集」。翌十六日「夏夜偶詠」 ○七月十二日「自叙吟」	
天明六年 丙午 三十二歳	○夏「丙午夏咏囊螢」 ○十一月一日、若林強斎講「笏訓訣」他を筆写す。識語に「川島寛正」とあり	○八月二十五日、徳川家治薨す、年五十 ○八月二十七日、田沼意次老中を辞す

<p>天明七年 丁未 三十三歳</p>	<p>○正月十九日、西依成斎中臣被講義を筆写す</p>	<p>○四月十五日、徳川家斉將軍宣下 ○六月十九日、松平定信老中首座となる</p>
<p>天明八年 戊申 三十四歳</p>	<p>○正月三十日、京都大火。「戊申皇都記事」 ○二月二十二日、室上田氏歿す、年二十二 ○六月十六日、風雨殊甚、詩あり</p>	<p>○三月二十二日、西依孝禎歿す。年二十六</p>
<p>寛政元年 己酉 三十五歳</p>	<p>○八月五日「復谷謙吉書」 ○九月「扁額文」 ○十月十一日「与佐野文甫書」書中に名を「直正」とす ○「奉賀石原明府耳順初度」</p>	<p>○正月二十五日改元</p>
<p>寛政二年 庚戌 三十六歳</p>	<p>○三月十一日、父正元致仕す。「賀大人致仕」 ○六月十三日「与石莊明府書」 ○秋、長女富生る（与谷謙吉書） ○十一月二十二日、天皇新宮遷幸、これを拝して詩あり ○冬「代小谷氏記于酒銘背」</p>	<p>○五月二十四日、異学の禁 ○十一月二十四日、村田季武歿す。年七十</p>
<p>寛政三年 辛亥 三十七歳</p>	<p>○八月九日「与古川立祐書」 ○十一月五日、父正元歿す、年七十二</p>	
<p>寛政四年 壬子 三十八歳</p>	<p>○八月二日、妹某歿す、年二十五 ○十一月「送小林安生宦遊東武」 ○女子某生る</p>	<p>○四月、多賀垂加靈社再興さる</p>
<p>寛政五年 癸丑 三十九歳</p>	<p>○正月「贈内鳥玄策并引」 ○「賀梅亭紀氏六十初度」</p>	<p>○五月二十二日、松坊順專歿す。年六十一 ○六月二十八日、高山彦九郎歿す。年四十七 ○七月二十三日、松平定信老中を免ぜらる</p>

<p>寛政六年 甲寅 四十歳</p>	<p>○二月「算工片岡氏納隸首像篋之記」 ○六月、脚氣を病み七月まで臥す。詩あり ○十月「痘瘡篇」 ○中庸を講ず</p>	<p>○上原立齋生る ○十二月二十二日、石原正範歿す。年六十五</p>
<p>寛政七年 乙卯 四十一歳</p>		<p>○三月十一日、石原正通、大津代官に任ず</p>
<p>寛政八年 丙辰 四十二歳</p>	<p>○四月十四日、姉某歿す、年四十五</p>	<p>○三月、若林強齋墓所修復の事あり</p>
<p>寛政九年 丁巳 四十三歳</p>	<p>○「哭成齋西依先生」</p>	<p>○閏七月四日、西依成齋歿す。年九十六</p>
<p>寛政十年 戊午 四十四歳</p>	<p>○十月八日、近思録為学以下開講</p>	<p>○西山拙齋歿す、年六十四</p>
<p>寛政十一年 己未 四十五歳</p>	<p>○六月五日、楚辞開講 ○「祭田島定明文」</p>	
<p>寛政十二年 庚申 四十六歳</p>	<p>○七月二十日、守中翁神道筆記を筆写す ○八月、神道劄記を筆写す</p>	<p>○一月十一日、西依墨山歿す。年七十五</p>
<p>享和元年 辛酉 四十七歳</p>	<p>○正月十日「哭小野可行」 ○四月十三日、富歿す、年十二。「悼長女富」 ○六月十一日、孟子序説開講、七月一日に至りて終る ○六月二十五日、楚辞満講 ○冬、延平答問を会読す ○論語開講、十一月二日に至りて終る</p>	

<p>享和二年 壬戌 四十八歳</p>	<p>○三月十九日、小学内篇開講、八月四日に至りて終る ○春、同志と上蔡語録を校合す ○五月十一日、孟子開講、八月六日に至りて終る ○六月より七月、京畿洪水。「壬戌洪水作」 ○九月、宝基本記抄を筆写す</p>	
<p>享和三年 癸亥 四十九歳</p>	<p>○九月朔日、邑田仲龍に書を送る ○秋、奥野寧齋病臥、枕辺に侍す ○「哭奥野寧齋先生」</p>	<p>○十一月十八日、奥野寧齋歿す。年六十八</p>
<p>文化元年 甲子 五十歳</p>	<p>○二月、栗齋改点の『朱子行状』刊せらる ○三月十日、小学開講 ○九月二十八日、母鳥居氏歿す、年七十二 ○十一月七日、「喪葬私考序」 ○「代某官吏書於盤背文」</p>	<p>○冬、京大津間に車石を敷く ○十二月八日、鈴木尋思齋歿す。年六十一</p>
<p>文化二年 乙丑 五十一歳</p>	<p>○四月二十三日、京に若槻幾齋を訪ふ ○九月、栗齋再校附点の『五経』（闇齋点と称す）刻成る ○「祭宮崎帶刀文」</p>	
<p>文化四年 丁卯 五十三歳</p>	<p>○二月、多賀に垂加靈社を祭る（「祭垂加靈社文」） ○三月二十九日、論語開講、文化八年五月十四日、顔淵篇にし て止む</p>	
<p>文化五年 戊辰 五十四歳</p>	<p>○三月、若林強齋講感興詩講義を筆写す ○六月一日、若林強齋講大学序講義に跋す ○八月二十一日、白鹿洞書院揭示開講 ○九月二十三日、中庸開講 ○九月二十四日、女子某歿す、年十六</p>	

皇學館大学創立百四十周年・再興六十周年記念『皇学論纂』

文化六年 己巳 五十五歳	○八月二十四日、伊川先生四箴開講、十一月十二日に至りて終る	
文化七年 庚午 五十六歳	○二月五日、小学開講、翌年五月二十日、敬身篇にして止む	○七月七日、紀椽亭歿す。年七十七
文化八年 辛未 五十七歳	○二月十六日、若林強齋講大家商量集師説に跋す ○神武紀を講ず。病により中途にして止む ○七月二十二日、歿す	

註

(1) 近藤啓吾翁「西依成斎の学勲」(同『若林強齋の研究』神道史学会、昭和五十四年に所収)、同『小野鶴山の研究』(臨川書店、平成十四年)、岸本三次氏「西依成斎基礎資料集」(岩田書院、平成十七年)、同「西依成斎の書―その「個性」と「普遍性」について―」(『東洋文化』復刊第九十六号、平成十八年)、「西依成斎の日々」(同第九十八号、平成十九年)、「西依成斎の交友」(同第百号、平成二十年)他。

(2) 拙稿「望楠軒学派の展開―奥野寧斎の学徳―」(『皇學館大学神道研究所所報』第七十八号、平成二十三年)、拙編『垂加神道未公刊資料集一』(皇學館大学神道研究所、平成二十四年)、同『垂加神道未公刊資料集二』(皇學館大学研究開発推進センター神道研究所、平成二十八年)を参照。

(3) 岡彪村翁編刊『日本道学淵源録』(昭和九年)は、続録卷之五の西依成斎条に附して栗斎条を立て、この碑文を引いてゐる。

(4) 京都市歴史資料館編刊『叢書京都の史料』七(平成十五年)所収。

(5) 渡邊忠司氏編著、清文堂出版、平成二十八年。また同氏「近世大津代官所同心の編成と勤務態勢の確立」(『佛教大学 歴史学論

集』第六号、平成二十八年）も参照。

(6) 盈科書院と村田季武については、茨木市史編纂委員会編『茨木市史』（茨木市役所、昭和四十四年）を参照。

(7) 旧丸屋町には、「西王母 東方朔 木偶記」の墨書を持つ人形の頭部を収める木箱が現存してゐる。その記文は、一部出入はあるものの、栗斎の「匱上文」と同内容である。詳しくは『大津祭総合調査報告書 十四 西王母山（桃山）』（滋賀民俗学会、昭和五十三年）、和田光生氏「大津祭曳山からくりに関する覚書」（『大津市歴史博物館研究紀要』二十三、平成二十九年）を参照。

(8) 佐藤賢一氏「近世日本数学史 関孝和の実像を求めて」（『東京大学出版会、平成十七年』）。

(9) 谷省吾氏旧蔵本。同氏「日之少宮の伝の論理―その神学的意義―」（『神道宗教』第三十三号、昭和三十八年）による。

(10) 九州大学附属図書館碩水文庫所蔵（オ／六）。

(11) 多賀の垂加霊社については、谷省吾氏「多賀の垂加霊社」（同『垂加神道の成立と展開』国書刊行会、平成十三年に所収）を参照。
(12) 渡邊忠司氏前掲『大津代官所同心記録』。

(13) 谷省吾氏旧蔵本奥書。同氏『神道原論』（皇學館大学出版部、昭和四十六年）附録その一「若林強斎『神道大意』」による。なほ同書には、松村保定が同じ本を書写した一本も紹介されてゐる。

(14) 英長については、『天津市志』の該項の他、岡彪村翁前掲『日本道学淵源録』続録増補巻下、榎木亨氏「日本近世期における楽律研究―『律呂新書』を中心として」（『東方書店、平成二十九年』第六章「内堀英長の『律呂新書』研究―『律呂新書』研究の楽学的展開―」を参照。

(15) 岡彪村翁前掲『日本道学淵源録』続録増補巻下。

(16) 岡彪村翁編刊、昭和十五年。

(17) 国立国会図書館所蔵。

(18) 坐春風文庫については、疋田啓佑氏「九州大学文学部中国哲学研究室蔵 坐春風文庫目録及び注」（『都城工業高等専門学校研究

報告』第四号、昭和四十四年）を参照。

(19) 蕪木文庫旧蔵資料は、郷土資料中の山口巖家文書、山口節家文書、鎌倉家文書に分割して寄託されてゐる。詳しくは柏木恒彦氏「上総道学と梅沢芳男（思齋）」（『東洋文化』復刊第一〇六号、平成二十三年）を参照。

(20) 『喪葬私考』については、近藤啓吾翁『増訂 浅見綱齋の研究』（神道史学会、平成二年）、松川雅信氏『儒教儀礼と近世日本社会―闇齋学派の「家礼」実践―』（ペリカン社、令和二年）に言及がある。なほ、梅田雲浜門の西川俛齋（名正義、称耕蔵）に『葬祭私略』（近江新報社、明治四十二年）の著があり、浅見綱齋・若林強齋の説と共に『喪葬私考』の説が多く引かれてゐる。

(21) 千葉県文書館所蔵の『蕪木文庫目録』（鎌倉家文書ア一五一八）、及び栗齋に関する梅澤氏の覚書（同ア二二四二）による。

(22) 入谷仙介・櫻木保両氏「隠岐地方漢籍目録」（『山陰文化研究紀要』第二十三号、昭和五十八年）に、『川島東齋先生論語講義説法序説』『東齋先生大学講義』『栗齋先生小学外篇講義』『中庸講義 栗齋先生』等が見えてゐる。「東齋」は「栗齋」の誤記にて、これらは恐らく川島栗齋の講説であらう。

(23) 朝倉治彦氏監修『近世出版広告集成』第一卷（ゆまに書房、昭和五十八年）。

(24) 岡彪村翁前掲『日本道学淵源録』卷之四所収「尚齋先生実記」上「遺事」註に引く上原立齋の語による。

(25) 近藤啓吾翁前掲「川島栗齋所講『論語講義』について―崎門朱子学概説―」。

(26) 清水則夫氏「浅見綱齋の神道観と道について」（『日本思想史学』第三十九号、平成十九年）。なほ、綱齋の神道観については、久保田収氏「垂加神道における浅見綱齋の地位」（同氏『神道史の研究』皇學館大学出版部、昭和四十八年）、近藤啓吾翁『増訂 浅見綱齋の研究』（神道史学会、平成二年）等を参照。

(27) 高島元洋氏『山崎闇齋』（ペリカン社、平成四年）第十章「垂加神道」「天人唯一説に対する批判」の項参照。

(28) 「闇齋学派に於ける神儒兼学の展開―妙契と習合と―」（『藝林』第卷第号、令和元年）

(29) 例へば、谷泰山『俗説贅辨』に「垂加翁儒書を語るや、一言も神道のうはさなし。神道をかたれるや、半句も儒書の沙汰なし。

別席にあつて別人の話^がを聞^がが如し」とある。

(30) 近藤啓吾翁校注『神道大系 垂加神道(下)』(神道大系編纂会・昭和五十三年)所収。この講義については、近藤啓吾翁「大学の講説」(同『若林強齋の研究』神道史学会、昭和五十四年に所収)、田尻祐一郎氏「闇齋学派―若林強齋を中心に」(源了圓氏編『江戸の儒学―『大学』受容の歴史』思文閣出版、昭和六十三年に所収)、牛尾弘孝氏「崎門における朱子学と神道―若林強齋の『大学序講義』を中心として」(『九州中国学会報』第三十一巻、平成五年)を参照。

附記 傳光院の栗齋以下川島家墓碑と檀家資料の調査については、同院副住職・松平康人師の御協力を賜つた。記して深甚の謝意を表します。

